

霊操 (exercices spirituels) の書としての
ルソー「サヴォワ助任司祭の信仰告白」

—パレーシア (本当のことを語ること) の視座から—

報告：室井麗子 (岩手大学)

司会：藤川信夫 (大阪大学)

これまで、ジャン＝ジャック・ルソーの「サヴォワ助任司祭の信仰告白」(『エミール』第4編)は、主として、ルソーの認識論および形而上学の書として読まれ検討がなされてきた。

本報告では、これらの先行研究を参照しつつも、むしろ、このテキストが『エミール』という教育書に挿入されている点に鑑み「霊操 (exercices spirituels)」と呼ばれる自己鍛錬・自己実践の書としてこのテキストを読み直すことを試みる。

その際、視座としては、1980年代以降ミシェル・フーコーの思索の主眼であった「パレーシア (本当のことを語ること)」を用いる。フーコーによると、「本当のことを語ること」あるいは「率直に語ること」といった意味を持つパレーシアは、真理を語る主体と真理を語られる他者との関係の中で展開される自己鍛錬・自己実践であり、霊操の中心に位置するものであった。

エミールの教師は、自らの師の「真理の語り」を、エミールに向かってどのように「真理の物語」として語り直すのか、そしてこの行為を通して、エミールと教師との関係はどのように再構成され、ひいては、エミール自身はどのように変容し再構成されるのか。これらの考察を通して、「サヴォワ助任司祭の信仰告白」が『エミール』に挿入されていることの意味について考えてみたい。

教育思想史学会
第20回大会
プログラム

History of Educational Thought Society

2010.9.19 Sun. - 9.20 Mon.
日本大学文理学部百周年記念館

教育思想史学会事務局

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部教育学科

下司研究室気付

事務局 E-Mail: hets@chs.nihon-u.ac.jp

【第1日】9月19日(日)

9:00-11:00 理事会・編集委員会合同会議 会議室3

11:00- 受付 百周年記念館入口ホール

12:00-13:45 フォーラム1 国際会議場
マルティン・ブーバーにおける言語・時間・力
—〈隔たりと分有〉の哲学とは何か—

14:15-17:15 シンポジウム 国際会議場
教育批判の思想的根拠
—長期的展望のなかで考える—

17:30-18:15 総会 国際会議場

18:30-20:00 懇親会 さくらホール(第二体育館内)

【第2日】9月20日(月)

10:00-11:45 フォーラム2 国際会議場
霊操 (exercices spirituels) の書としての
ルソー「サヴォワ助任司祭の信仰告白」
—パレーシア(本当のことを語ること)の視座から—

12:00-13:15 ランチタイムセッション 会議室2
教育思想史学会の思想史
—『教育思想史コメンタール』がうつつだすもの—

13:30-16:30 コロキウム 会議室1
教育と言語をめぐる思想史 会議室3
「甘え」の比較人間形成論 会議室4
子供をめぐる科学と技術の教育思想史

※ランチタイムセッション、コロキウムについては、
別紙をご覧ください。

【大会参加費】

会員：一般＝2000円 院生等＝1000円

非会員：一般＝2500円 院生等＝1000円

懇親会費：一般＝5000円 院生等＝3000円
(懇親会費に会員・非会員の別はありません)

マルティン・ブーバーにおける
言語・時間・力

— 〈隔たりと分有〉の哲学とは何か—

報告：小野文生（京都大学）

司会：丸山恭司（広島大学）

「対話哲学」の思想家ブーバーが生涯を通してじつに様々な翻訳をしたことは、意外に知られていない。だがこの思想家の思想的成熟にとって、翻訳の営為は不可避的だったのではないか。たんに「哲学者にして翻訳者」だったのではなく、「哲学者であること」と「翻訳者であること」が同值的だったのだとすれば、したがってまた、たんに翻訳者だったというよりはむしろ「翻訳的に思考した」とさえ表現しうるとすれば、その翻訳の思考を問うことはそのまま彼の哲学の根柢に触れることになるだろう。

そう見立てた上で、しかしここではその膨大な「翻訳論」を辿ることは断念し、その一歩手前で問いを立てる。ベンヤミン、ショーレム、ローゼンツヴァイク、レヴィナスらと交わりつつ、翻訳がほとんど救済を意味するほどに特異な神学的意義を帯びていた時代であって、対話と称される哲学において人間の言語的経験はどのように構成されえたのか。これは、対話概念の通俗的理解を離れ、ブーバーの哲学を *dia-logos* の本態へ差し戻し、〈隔たりと分有〉の哲学として解釈する試みでもある。

神秘主義の深淵に向き合いつつ、反復と力の生成という思想の系譜のもとでブーバーを捉え直し、言語と時間の連関を主題化してみる。いっさいの制度を打ち破りつつ生成する世界を捉えようとしたひとりのユダヤ人の眼に近代はどう映ったのか、その相貌を照らし出す。

教育批判の思想史的根柢

— 長期的展望のなかで考える —

発表：田中智志（東京大学）
鈴木晶子（京都大学）
相馬伸一（広島修道大学）

司会：今井康雄（東京大学）

本シンポジウムは、第18回大会のシンポジウム「検証：思想運動としての教育思想史学会」での議論に対する、一つの応答の試みとして位置づけられるだろう。先の「検証」シンポジウムで議論の焦点となったのは、近代教育思想史研究会が標榜し教育思想史学会が受け継いだ「近代批判」という枠組みの功罪であった。

たしかに、近代批判は、教育の現状をその歴史的な深層構造において批判可能にし、教育思想史研究のアクチュアリティを鮮やかに示して見せた。しかしそれは、既存の教育への信頼を揺るがし、そのことによって間接的にはあれ新自由主義的な教育改革に加担する結果になってしまったのではないか。— こうした、教育思想史学会にとって重く厳しい問いが、「検証」シンポジウムでは浮上した。

本シンポジウムでは、この問いを、「検証」シンポジウムでのように教育思想史学会の問題として議論するのではなく、他ならぬ教育思想史の問題として捉え直すことを試みたい。教育の現状に批判的に対峙することは、近代の教育思想が持つ思考の習慣のようなものであり、教育思想の生成・展開の原動力ともなってきた。教育現実と教育思想との、こうした「批判」を介したダイナミズムを、思想史的に取り出して分析する必要がある。そうすることで、われわれの現状を長期的な歴史的パースペクティブのなかに置き直し、単純な功罪論を超える視野を開くことも可能になるに違いない。

本シンポジウムは従って、上のような重く厳しい問いの前に立たされるというピンチを、教育現実との思想史的關係を再獲得するためのチャンスに変えようという試みでもある。

この試みを導く問いとして、以下のようなものが挙げられるだろう。

教育思想は「教育」をどのように概念化してきたのか、言い換えれば、「教育」なるものがどのように区分され取り出されたのか。同時代の教育を対象化し批判する根柢を、教育思想はどこに、どのように見出してきたのか。教育思想は同時代の教育にどのように関与していたのか。

これらの問いを、本シンポジウムでは「コメニウス」「ヘルバルト」「デューイ」という三つの名前と何らかの形で結びつけて検討し、討論の対象に供することにしたい。

〔第2日〕 2010/9/20 12:00～13:15
会議室2

Lunch Time Session

教育思想史学会の思想史

—『教育思想史コメンタール』が
うっしだすもの—

企画・司会: 松浦良充(慶應義塾大学)

話題提供: 田中智志(東京大学)

山名 淳(京都大学)

鈴木晶子(京都大学)

綾井桜子(十文字学園女子大学)

下司 晶(日本大学)

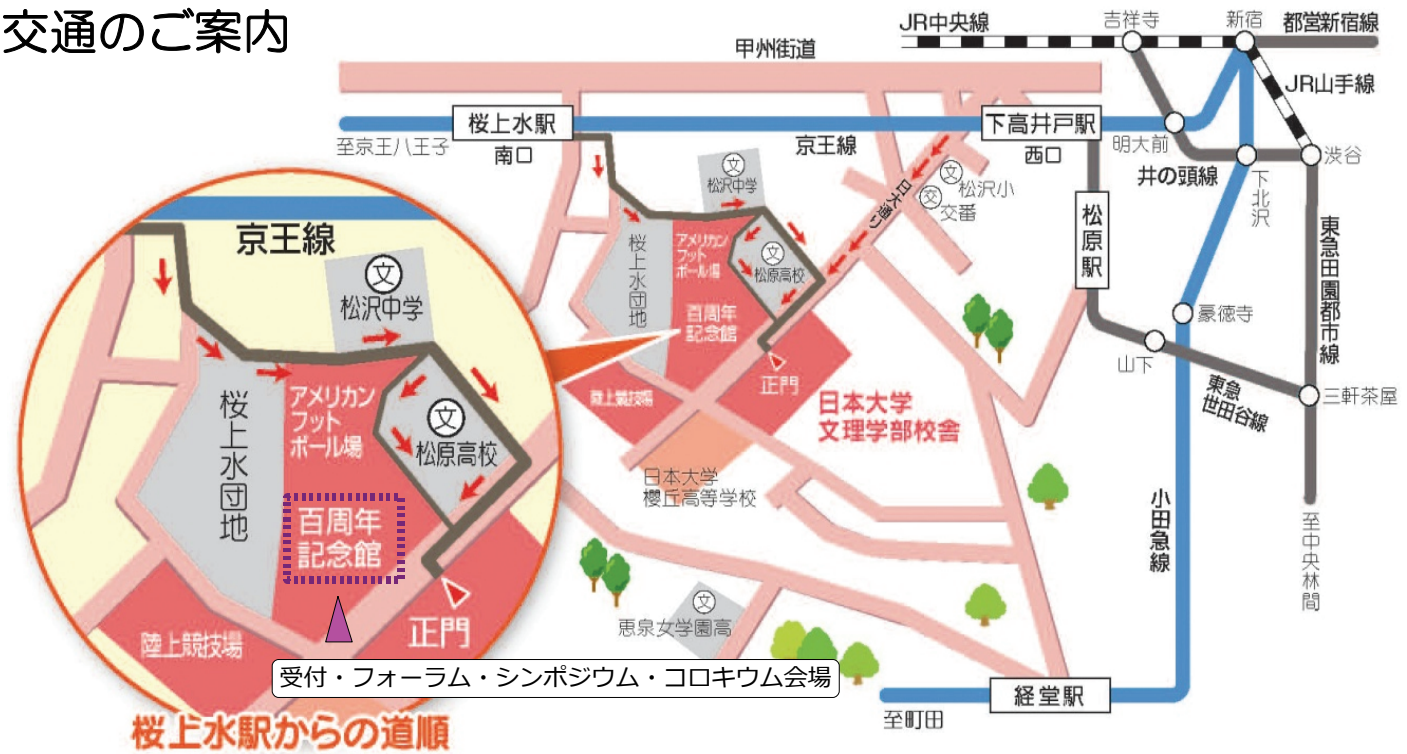
西村拓生(奈良女子大学)

学会特別事業としてとりくまれている『教育思想史コメンタール』の執筆・編集過程から、私たちの学会の使命と課題はどのようにあぶりだされてきたのか。

編集委員・執筆者、また企画進行に尽力をいただいた事務局長経験者から、企画・執筆・編集の過程で考えたことについて話題提供をいただいた後、ざっくばらんにこれからの教育思想史研究のあり方について話し合いたい。

昼食を召し上がりながらお気軽にご参加下さい。参加をご希望の方は、ご昼食をご持参頂くか、8月25日までにお弁当のご予約をお願いいたします(大会当日のご予約はできません)。

交通のご案内



交通: 京王線「下高井戸」駅・「桜上水」駅下車、徒歩8分

乗車時間: 京王線 新宿一下高井戸 約10分

新宿一桜上水 約12分

JR線他～吉祥寺(明大前)一下高井戸 約15分

渋谷(明大前)一下高井戸 約11分



教育思想史学会第20回大会・会場

日本大学文理学部百周年記念館

東京都世田谷区桜上水3-25-40

教育思想史学会第20回大会

2010.9.19(日)～9.20(月・祝)

Colloquium 1

教育と言語をめぐる思想史

企画・司会：森田伸子(日本女子大学)
報告：綾井桜子(十文字学園女子大学)
上原秀一(宇都宮大学)
柴山英樹(聖徳大学)
渡辺哲男(滋賀大学)
コメンテーター：小野文生(京都大学)
北詰裕子(東京学芸大学)

本コロキウムは、言語観と教育観の近代以降の展開を、具体的な思想家を取り上げて検討し、教育と言語が、単に外的に結びつくのではなく、本質的・内的な関係を持つものであると考えるヨーロッパの教育=言語思想の特質を、明らかにしようとするものである。

今回私たちは、日本の子どもの言語能力が改めて問題視され、新たな取り組みが行われている状況に対して、教育と言語の関係を本質的なところで捉えるための一定の視点を提供するために、次の四つのテーマをとりあげる。

(1) 言語を力や活動として捉えたフイエの理論について、古典語教育論の系譜を視野に入れながら、国語としてのフランス語と古典語が取り結ぶ関係という観点から考察する。(2) コンディヤックを、人間の思考における言語の役割に関する新しい理解の在り方と、そうした理解に基づいて提示された新しい教育観の課題という観点から考察する。(3) シュタイナーが身体と言語の新たな布置を構築しようとした点を、音楽的なものと造形的なものとの総合の可能性を具体的に追求する実践から考察する。(4) 西欧の言語思想が、明治以降、いかに日本に接続され、「国語」教育を根底的に規定する構図を作り上げてきたかについて考察する。

Colloquium 2

「甘え」の比較人間形成論

—土居理論と教育現実のあいだ—

企画：櫻井 歓(日本大学)
司会：小玉重夫(東京大学)
報告：須川公央(弘前学院大学)
関根宏朗(東京大学大学院)
櫻井 歓(日本大学)
指定討論者：生田久美子(東北大学)
下司 晶(日本大学)

「甘え」は現在、子育てや教育の実際場面で子どもの言動を見立てる際に、最も馴染みの深い言葉の一つである。土居健郎(1920-2009)のいわゆる「甘え」理論の功績は、日本語の日常語であるこの言葉の一つの概念として擲り上げた点にある。しかし、その概念規定の妥当性をめぐっては夙に論争が展開されてきたほか、最近では『「甘え」の構造』(1971)を含む各種の日本文化論が総じて恣意的な比較論にすぎないとの批判さえある。

本コロキウムでは、かくも論争的であり、また精神分析・日本人論・文学論など多様なコンテキストからの読解可能性をもつ土居のテキストを、人間形成論というコンテキストにおいて読解していく。「甘え」理論をいわば楕円の一つの焦点として、そこに3人の報告者が、「精神分析」(須川)、「人間性心理学」(関根)、「西田哲学」(櫻井)といった各々の専門領域から焦点を設定し、重層的な楕円を描くような比較研究を目指している。コロキウムを通じて、「甘え」理論が近代的自我における〈依存と自立〉の二項対立を架橋する可能性とともに、そこにみるケアの関係を含んだ親密性の重視が一面においては母親責任論に帰結することの問題性などが読み拓かれることとなろう。

Colloquium 3

子どもをめぐる 科学と技術の教育思想史

—世紀転換期における都市という磁場—

企画：渋谷亮(大阪大学大学院)
司会：山内紀幸(山梨学院短期大学)
報告：渋谷亮(大阪大学大学院)
藤田雄飛(大阪大学)
國崎大恩(大阪大学大学院)
指定討論者：山名淳(京都大学)

19世紀後半以降の西洋社会における科学・技術の進展は、子どもを取り囲む状況を大きく変えていった。しかしながら、これまでの教育史・教育思想史研究は近代における科学・技術の在り方に一面的にしか焦点を当ててこなかったのではないだろうか。本コロキウムでは、アクターとネットワークという観点から科学・技術的な諸現象を捉え直すアクターネットワークセオリーを参照しながら、19世紀半から20世紀初頭にかけての子どもをめぐる科学と技術の諸相を検討していく。これによって従来の科学観、技術観を超えて、科学・技術が教育的・教育思想的な諸問題と絡み合う過程を明らかにすることを目指す。具体的には都市を背景としながら、空間配置とモノの動きに着目し、〈パリにおける母子関係の成立〉・〈ウィーンにおける精神分析の成立〉・〈シカゴにおける実験学校の成立〉という三つの舞台を技術／知／権力の絡み合いとその変動という観点から描きだす。このような作業は、近代と近代教育を捉えなおし、さらには歴史・思想史研究の新たな可能性を探る試みともなるだろう。